

サウンドとヴィジョン

デヴィット・カニングム×藤本由紀夫

これは人間の知覚そのものに焦点を当てた展覧会である。単に身体機能として働く聴覚や視覚体験が、デヴィット・カニングム（1954年、アイルランド生まれ）と藤本由紀夫（1950年、名古屋生まれ）により、人をうならせる芸術的な成果を達成するものとして用いられている。私達が単に聞こえるものを聞き、見えるものを見るという当たり前のことを最大限に活用しているのだ。

今回はカニングムと藤本、共に国際的に高く評価されている二人のアーティストが、初めて共同で行う展覧会である。お互いの作品についてよく理解し（さらには称賛し）て来た二人が、同じような美的命題にたどりついた。そして錯覚を起こさせるような表現の仕方は避け、メタファーを使わず、私達の体験は芸術的なものもそうでないものも全て基本的には感覚器官と神経系によって決まるということを認めながら、今ここでリアルタイムで起こっていることに重点を置いている。

今回の展覧会でカニングムは「リスニングルーム」という彼のコンセプトをもとに新しい作品を制作した。彼が追求し続けている、音と聴き手と環境の関連性の明示。それはギャラリースペースの共振周波や不可聴音を、音として認識できるようにする音響システムのことである。このプロセスは人が室内を動き回ることによって生じる周囲音、湿度、空気の動きといったごくわずかな音響変化により調節される。つまりギャラリー内にいる人の存在がその作品の目的とテーマとを結びつける。

カニングムは、「時間やロケーションによって、彫刻がとらえる光のパターンが異なるのと同じように、この作品も固定した構造が室内条件により変化するという意味において、ひとつの彫刻であるとも考えることもできる」と説明する。また、藤本はヴィジュアルアートとの類似性について触れ、「私は常にそれがまるで絵画であるかのように作品を作っていく」と述べている。彼の作品はギャラリー全体を媒体として、私達の感覚器官に響くように音やモノの様々な例を展示する。それぞれの展示物はそれ自体で一つのものとして完成しているものもあれば、いくつかかがまとまって一つのグループになっているものもある。

藤本は特に「視点」に気を配っている。その視点を聴覚体験にも視覚的現象にも等しく適用している。彼が提示している作品においては視聴者の位置や動きがその作品を体験し理解するためのキーとなる。彼の「哲学的玩具」と呼ばれる様々なレディメイド（時計、レンズ、キーボード、ステレオスコープ等）や動くモノの集まりをアートとして示すことで、藤本は私達が当たり前のことと捉えていること、すなわち私達の日常の生活の中に、新たなものを発見する旅へと連れて行ってくれる。

カニングムは彼の作品を特徴づける信念を顧みながら、「扉はいつも開いているべき、あるいはあなたのために開けられているべきである」という考えを提唱している。まさにこの展覧会での両アーティストのための言葉かもしれない。

ジョナサン・ワトキンス

(Translated by Christopher Stephens)